



時事寸評⑱

水俣病公式確認50年の今

花田 昌宣

＜ものも言えない体も動かせない胎児性患者の「告発」？＞

「水俣の最重度の胎児性の患者を前にして、この人は生きる権利があるのかなのか、自問しない人はありません。たいていはその重さに負けてしまいますが。つまりいわば植物人間のような患者をみて、『この人には生きる権利というのは該当しないけれど、ただ犠牲者として告発するものとしてそこにいる』などと言う。そして私たちはその告発をどう受けとけるのかと考える。」最首悟『星子がいる』429頁1998年

30年以上も前、水俣病第一次訴訟が闘われていたころ『生ける人形の告発』という本が刊行された。これは、胎児性水俣病患者が人形のように美しい、自分では身体を動かすことができないばかりか、話せないし感情も表さないけれども、みずからの存在で水俣病事件を告発しているという患者だ、と言うわけだ。これは美しい話なのだろうか、それとも残酷な差別物語なのだろうか。

実は、水俣病の闘いは、このTさんであれ、天使のような美少女として写真に残るMさんであれ、このイメージを被害の象徴の表象としてかかげて来なかったか。これほどまでに

重症でない患者でも、しょうがいをもっていることが告発の出発点とされ、それを突き抜けることができていなかったのではないか。数年前上村智子さんの家族は、ユージンスミスの撮影した有名な母子入浴の写真の利用を断られた。智子は亡くなって以降もう十分働いたから休ませてやりたい。

日本のしょうがい者運動が築いてきたもの、そして今日「障害学 Disability Studies」で訴えられているのは、「これまで否定的に受け止められることが多かった障害者の経験の肯定的側面に目を向けること」ではないのだろうか。自らの生を犠牲にして告発すること、これがその人びとの生きる価値だともいうのだろうか。このように生まれてこなければよかったのに、という考えがどこかに潜んではいないか。

＜「若い患者」の自立への試みと蹉跌＞

70年代半ばに、水俣の若い患者達の集まり「若衆宿」が作られ、胎児性の患者をはじめとする若い患者の「自立」を考える「運動」が作られようとしたことがあった。その後、様々な形で胎児性の患者を支える作業所、集まる場所、集まりが幾度も作られてきた。その核心点は、水俣病差別とどう闘うか、を置いて他なかったはずであった。しかし、実際の課題は大人からの自立をどうかちとるかということであったようだ。

「自立」について私が思うのは、様々な学術

的な修飾語や政治的な表現を中和化して言う、「親元を離れ、施設でない場所で、自分が生きたいように、介助が必要ならそれを得て、暮らす」立岩真也『障害学への招待』ということであった。親のであれ、「福祉」のであれ、パターンリズムを拒否すること、これであった。若い患者達も直観的にこれを求めていたはずであったと思いたい。若い患者の試みが、先進的なしょうがい者運動と無縁であったとは思えない。様々な経路を経つつ影響を受けていたのだと思う。

では、この自立をどのように実現していくのか、ことは具体的であった。この自立を獲得するには種々の条件と手段とを必要とした。仕事を求めた。集まる場所を設けようとした。いくつもの「作業所」を作る試みがなされた。支援者はいた。しかし、最大の問題は、親元からの自立であった。それを突き抜けることができたのだろうか。そして、それを突き抜けるには、水俣病差別と敢然と立ち向かうほか道はなかったのではないだろうか。そして、それは今もそうであろう。若い患者はしょうがい者差別と水俣病差別の両面において闘うことを余儀なくされていたはずであった。その壁はあまりにも大きかった。

＜いかなる生を送るのか：患者と地域の課題＞

水俣病患者家族はあまりにも孤立していた。私にはそうとしか思えない。胎児性患者を守るものは何であったか。私にはうまく表現で

きない。水俣に足しげく通うようになって、今見ること、聞くことは、水俣病がどれほどまでの負の価値観をもって語られ続けていくのか、ということである。「我が家から水俣病を出すのは恥ずかしい。」水俣市民の日常生活の中で今も語られるこの言葉、この感覚を私はどのようにしたらうまく伝えることができるのか分らない。それは水俣病事件の長い歴史をひも解いていかなければこの語感伝わらないのではないか。

過去において水俣のしょうがい者は、胎児性患者をはじめとする水俣病患者と連携することはほとんどなかったらしい。自分たちが水俣病患者と同じだと見られなくなかったからだという。1965年に障害を持って生まれた子どもが医師から脳性まひだと言われとき、ほっとした父親。水俣病なくて良かったとつぶやいたという。最近もそういう話を聞いた。

胎児性・小児性水俣病患者の「親なきあと問題」は、深刻である。この水俣で、いかなる生を送っているのか、50歳になる子どもの問題だけではない、親自身が問われているのである。親の世代は我慢してでも苦勞してでも耐えて生きてきたという。残される子どもの施設や介助をどうするのかという問題をこえて、もっと本質的な課題が水俣には横たわっている。水俣病50年の到達点というには現実あまりにも厳しい。

(本研究所研究員 社会政策)